A16　重症妊娠中毒症を発症した糖尿病性腎症合併妊娠の一症例

前川有香，杉山陽，中山愉紀子，小畑英慎，川口香，日下秀人，守屋光彦，陽川英仁，伊東雅純，豊田長康（三重大学医学部附属病院周産母子センター）

本症例は8歳発症の1型糖尿病であり，糖尿病網膜症と糖尿病性腎症の診断を既に受けており，妊娠前は内科医により管理されていた．妊娠6週頃に妊娠管理目的のため当センターを紹介された．初診時HbA1cは6.5%，尿蛋白は100mg/dlであった．1日約28単位の強化インスリン療法を受けていた．外来において血糖管理を行っていたところ，妊娠中期より尿蛋白の増加，血圧上昇傾向を認め28週時に入院の上管理された．血糖コントロールは良好であったが，徐々に妊娠中毒症が悪化し，著明な蛋白尿（約10g/日）を認め，妊娠33週で帝王切開を施行した．児はsmall-for-dateで新生児合併症として低血糖・呼吸窮迫症候群が認められた．

糖尿病性腎症合併妊娠では，混合型妊娠中毒症の発症や帝王切開率が高く，周産期合併症としては子宮内胎児発育遅延・早産・呼吸窮迫症候群の頻度が高いことが報告されている．本症例においてもこのような合併症が認められたことより，糖尿病性腎症合併妊娠では特に母体の妊娠中毒症および周産期合併症に対する管理が重要であるを改めて知らされた．